文学運動の流れのなかから

平野 謙

筑摩書房

文学運動の流れのなかから

昭和四十四年八月二十五日　初版第一刷発行

定価　九八〇円

著者　平野謙

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社　筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二の八
郵便番号　一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一(代表)
振替　東京　四一二三

理想社印刷・鈴木製本

CS 82023

© 平野謙 1969

目次

第一部
文学運動の流れのなかから 7
第二部
佐多稲子論 71
小林多喜二論 108
中野重治論 I 126
中野重治論 II 151
第三部
ロシア共産党の文藝政策と中野重治 187
福本イズムと中野重治 200
コップ結成と中野重治 214

転向文学と中野重治 228
片口安吉と中野重治 244
啄木・茂吉と中野重治 263
ナルプ解散と中野重治 278
社会主義リアリズムと中野重治 302
第四部
「政治の優位性」と「文学の自律性」 357
四人のプロレタリア作家 376
たたかいやぶれたものの嘆き 394
あとがき 419

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

文学運動の流れのなかから

第一部

文学運動の流れのなかから

ひとつのプロテスト

最近の総合雑誌を瞥見すると、各誌とも大学紛争の特集に大きなページを割いている。もう十年くらいたつと、あのときの大学紛争が日本の革命の発端だったなァということになるかもしれない、とだれかが語っていたように、もはや今日の大学紛争が単なる大学内部の自治権の処理問題などをこえていることは明らかだ。となれば、総合雑誌が大学紛争に大きなページを割いていることも理の当然だろう。しかし、目下のところ私はそれら大学紛争に関する諸論文を熟読する熱意に乏しい。もともと受容能力のせまい私は、老来ますます狭隘になってきたらしい。ただ唯一の例外として、吉野源三郎の『山本君に言いたかったこと』（世界・三月号）を興味ふかく読了した。おそらく東大全共闘議長の山本義隆を、吉野源三郎が個人的に識っていて、そのエッセエを「個人的な手記」というかたちで書きあげていることに、私は一種の文学的リアリティを感得したからだろう。

しかし、ここで『山本君に言いたかったこと』自体について論ずるつもりはない。私は私なりに愛読したことをしるせば足りる。ただそのなかで吉野源三郎が昭和初年の福本イズムの影響について言及している個所におのずと注目させられた所以を、まず書きとめておきたいと思ったまでである。

吉野源三郎は書いている。若い活動家によってかわされる「理論闘争」は、ともすればどちらがよりラディカルであるかのせりあいになりやすい。分裂を賭しても革命的な主体の形成が優先的な課題となり、そこから生れる極左的偏向に対しては、大衆というフィードバックがないだけに、運動のいたましい失敗以外に歯止めがない。そして、失敗の結果として、あたかも革命運動が大衆のためにあるのではなく、大衆が革命運動のためにあるかのような倒錯に陥ってゆく。同時に、同一陣営内の対立・抗争・分裂にともなう独得の怨恨は本来の敵よりもそむいていった仲間にむかって深まってゆく。吉野源三郎はかつての福本イズムの「理論闘争」の悪影響について、そう語っているが、それが単に一時期の福本イズムにとどまるものでないことを、『山本君に言いたかったこと』全体は訴えていると思う。

たしかに「内ゲバ」というような陰惨な言葉が無抵抗につかわれ、そういう状況をほとんどだれも怪しまぬような今日、吉野源三郎の指摘した本末顚倒は、日本の革命運動のあしき体質にまで固定化している、といってよかろう。その点がむかしから私には気にかかっていた。たとえば昭和八年に書かれた三好十郎の『斬られの仙太』は、こういう革命運動のあしき体質を批判しようとした先駆的な作品にほかならない、というのがかねてからの私の意見である。

しかし、かつて私は革命運動に組織的な関係を持ったことがなく、これからも関係するとは思えない。そういう男が過去、現在、未来を問わず、革命運動についてウンヌンすることはオコの沙汰かも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

しれない。ただ私は革命運動の一端といえないこともない文学運動に、多少の関係を持ったことがある。その経験をここに語りたい。昭和初年代におけるプロレタリア文学運動とのかかわり、昭和二十年代における戦後文学運動とのかかわり、昭和三十年代における民主主義文学運動とのかかわりを通じて、三十年以上の私一個の文学的回想をここに素描しておきたいのである。

今日の文学運動が組織的に新日本文学会と日本民主主義文学同盟とにひきさかれ、まっぷたつにひきさかれることによってともども閉鎖的となり、次第に文学的エネルギーを喪失してゆくかにみえる現状に対して、もしも私の文学的回想がささやかなプロテストになり得るならば、望外の倖せというものである。吉野源三郎は「年長の友人だけしか言えない助言」ということを書いているが、そういう助言の容れられる余地の残っているほど、私は今日の状況を楽観的にはみていない。そんな私でも「内ゲバ」とか「内内ゲバ」などという言葉を大して抵抗もなくつかう昨今の精神的デカダンスに対して、私の貧しい文学的回想が多少のプロテストにならないものかと希ってはいる——。

私が昭和初年代のプロレタリア文学運動と直接に関係を持ったのは、本多秋五の紹介でプロレタリア科学研究所（略称プロ科）に入所して、藝術学研究会に所属したときにはじまる。ところが、その精確な日時がいまの私にはわからなくなっている。本多秋五の略年譜に「昭和七年はじめ、プロレタリア科学研究所にはいり」とあるところをみれば、すくなくとも私は「昭和七年はじめ」以降にプロ科の藝術学研究会に所属したことになる。その点を思いちがいして、かつて私は昭和六年末にプロレタリア科学研究所に入所したように書いたことがあるが、それは誤りだった。ただおそくとも昭和七年の九月ころまでには入所していたことは確実である。その時点から私の回想ははじまる。

プロ科にはいる

なぜ私が昭和七年八・九月にはプロレタリア科学研究所にはいっていたことが確実かといえば、昭和七年十一月に発行された《マルクス・レーニン主義藝術学研究》という季刊誌に、私は小さな翻訳を載せているからである。その季刊誌は藝術学研究会編となっていて、有島武郎の親友の足助素一の経営する叢文閣が発売もとになっている。私はその翻訳によって生れてはじめて些少ながら稿料と名のつくカネをもらった覚えである。

しかし、そのことを語るまえに、プロレタリア科学研究所そのものについて若干の説明を加えておかねばなるまい。プロレタリア科学研究所は昭和四年十月に創立されたが、創立当時は四部にわかれていて、第一部は政治、経済、法律、社会、第二部は哲学、歴史、教育、第三部は文学、藝術、言語、第四部は精密科学、自然科学を研究対象としていた。初代所長は秋田雨雀で、第三部に所属する当時の中央委員は蔵原惟人、村山知義、新島繁、片岡鉄兵、中野重治の五人だった。私が入所した昭和七年ころには、新島繁をのぞく他の中央委員はすべて治安維持法違反容疑のもとに刑務所にいたはずである。プロ科全体としては月刊誌《プロレタリア科学》を機関誌としていたが、藝術学研究委員会は別に季刊誌《マルクス主義藝術学研究》を機関誌として発行していた。この季刊誌が《マルクス・レーニン主義藝術学研究》と改題され、さらに《藝術学研究》となって続刊されていったのだが、私が翻訳を掲載した号は改題第二集にあたっていた。

私のはいったころプロレタリア科学研究所は神田今川小路の江戸ビルというところに合法的な事務所を持っていて、藝術学研究会の部会なども毎週そこで開かれることになっていた。藝術学研究会のキャップは新島繁で、私はそこで作家同盟の川口浩や池田寿夫と知り合い、山室静や故泉充らともはじめて知り合ったのである。しかし、私はそこでどんなテーマの研究会を持ったか、ほとんど記憶にとどめていない。最初のことだから、いくらなんでも忘れるはずはないのに、ロクな記憶がないところをみると、昭和七年三月の日本プロレタリア文化連盟の大弾圧以来、もはやちゃんとした研究会など持てなくなっていたのかもしれない。ただ私はプロ科の連絡がかりとして、文化連盟加盟の他団体だけでなく、第二無新や救援会などとも定期的な連絡をとるようになった。

そうした日暮しのなかで、私は新島繁にいいつけられ、スペインの反戦文学に関する論文を、ドイツ語から翻訳することになったのである。昭和七年十一月に発行した季刊誌の原稿だから、同年十月には締めきられているはずである。とすれば、私が新島繁に翻訳を命ぜられたのは同年九月ころのことであり、おそくとも昭和七年八・九月までには私はプロレタリア科学研究所に入所していた勘定になる。

ここで新島繁のことにちょっとふれておくと、私の記憶に誤りがなければ、新島繁は本名を野上巌といって、新潮社の円本『世界文学全集』のなかの生田長江訳『神曲』を代訳したというもっぱらの評判だった。それかあらぬか、新島繁は柳田泉、木村毅を顧問格に、神崎清を事務長格に運営されていた明治文学談話会の機関誌《明治文学研究》に、周密な生田長江論を連載したが、おそらくそれは今日でも重要な長江論たる資格を失っていないはずである。東大独文出身ではいま中央大学にいる川口浩や菊盛英夫より先輩ではないかと思うが、もう十年ちかくも前に神戸大学に赴任して間もなく、

肝臓癌で亡くなった。勤勉で誠実な人柄であったにもかかわらず、ついにその博識にふさわしい業績をまとめ得ずして、中道にたおれた感がふかい。私がプロ科にはいったころ、たしか新島さんは高円寺で古本屋を営み、美しい妹さんがマネキンとしてかせいでいたようにおぼえている。

ここでわたくしごとをはさめば、私はプロ科に入所する前にも、多少左翼的な仕事に従事していたが、その当時の雰囲気については、つい最近藤枝静男が書きあげた中篇『或る年の冬』（群像・四月号）にかなり詳しく描かれている。作者もことわっているように『或る年の冬』に描かれたことがすべて事実だというのではない。いや、私らしい青年がモデルとして登場してくる場面などは、みな著しく美化されているといっていい。にもかかわらず、ためらいながら左翼的な仕事に近づいていく青年のすがたとそれを傍観する青年のすがたとの対置という構図は、やはり当時の時代色をかなり忠実に表現している、といえそうである。ただ私一個についていえば、機械的に左翼の仕事に従事している不安と懐疑がないわけではなかった。もうすこし自己の資質にかなった仕事をしたいとねがって、プロレタリア科学研究所に入所したのである。

ネジのような仕事

昭和十二年七月に伊藤整は『破綻』という作品を《中央公論》に発表している。《中央公論》という檜舞台に発表した最初の小説であって、また、私が伊藤整という作家に関心した最初の小説でもある。しかし、私はこれまでもしばしば『破綻』に言及してきたから、ここでその読後感をくりかえす

つもりはない。ただ「あらゆる理想論を自我満足の仮装にすぎない」というシニカルな立場から、主人公の苦学生が「正しいことから人間が喜びまで見出そうなんてことは虫がよすぎるとしか思われないんだ」と、左翼学生どもを批判する言葉をはじめて読んだとき、思わず私はひるんだことをおぼえている。この『破綻』の主人公にくらべれば、藤枝静男の『或る年の冬』の主人公はよほど善意の人といってもいいが、それでも落第生の主人公は、左翼気取りで「運動」を楽しみながらやっている級友たちを、にがにがしくながめずにはいられなかった。この主人公のにがにがしいコンプレックスが実は『或る年の冬』のリアリティを保証しているのだが、そのことはしばらく措き、いまここでいいたいのは、プロレタリア科学研究所にはいったことに私はひとつのコンプレックスを感じていたという事実である。

プロ科にはいる前にも、私は多少左翼的な仕事に従事していたと書いたが、一口にいって、その仕事は組織という歯車の小さなネジになることを私に要求したのである。私はその要求にこたえる努力と緊張を強いられたが、次第にネジになりきることの苦痛にたえかねた。街頭連絡や文書の配布や会合の場所さがしは、オレでなければできない仕事ではない、という内心の声をおさえてもおさえきれなくなったのである。毎日毎日こんな機械的な仕事をさせられ、あげくの果てに検挙されても、オレは満足だといいきれるか、という懐疑をぬぐいきれなかったのである。単にそれだけではないにしろ、なんとか組織の諒解をとりつけて、私がプロ科に入所したのは、もうすこし自分の資質にかなった仕事がしたいという希求が主要な動機だった。

私の希いはかなえられたが、今度は合法的なプロ科にはいって、文学・藝術の研究に従事するなどということが一種の階級的後退にほかならぬのではないかというコンプレックスに、私はなやまされ

ねばならなかった。お前は虫がいいぞというひそかな自己呵責を切りすてることはできなかった。伊藤整の小説の主人公の言葉にひるんだのも、そういう私のささやかな経験に基づくものである。

しかし、期待したプロ科における文学研究の仕事は一向に進捗せず、私はここでも半非合法的な連絡がかりの仕事に大半の精力をとられることとなった。つまり、事態は大して改善されなかったわけだ。それでも、夕方から新しく友人となった泉充のアパートへ遊びにいって、やはり遊びにきていた近所の池田寿夫と文学談を試みることなどに、私は他流試合的な精神の喜びを感じたものである。その池田寿夫が昭和八年になると日本プロレタリア文化連盟（略称コップ）の書記局メンバーとしてほとんど非合法状態となり、そのレポーターとして私はつかわれるようになった。いま池田寿夫の年譜をみると、昭和七年五月にコップ中央協議会機関誌部長となり、昭和七年七月にコップ書記局にはいり、昭和八年五月に日本共産党に加盟し、コップフラクションとなる、とある。してみると、私が池田寿夫のレポーターとなったのは昭和八年五月以降とみるのが至当のようだが、私個人の記憶では、昭和八年二月二十日に小林多喜二が虐殺されたときは、すでにコップ関係の連絡に従事していたような気がする。

当時治安維持法が改悪され、日本共産党や日本共産青年同盟に加盟していなくても、それを支持するコップ加盟の文化団体に所属するだけで治安維持法にひっかけられ、起訴される可能性がでてきたというわさだった。なかでも地下にもぐった宮本顕治や小林多喜二の直接指導するコップ書記局などに所属していれば、それだけで起訴される危険は十分ある、といわねばならなかった。私は正式にプロ科からコップへ移籍するような話はだれからも聞かされなかったが、コップ関係の定期連絡をとるほかに、池田寿夫に命ぜられて、コップの機関誌《プロレタリア文化》の編集や校正なども手伝う

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.